主題：
諸召会における失敗、召会の堕落、召会における勝利者、召会の回復、召会の各段階

メッセージ　1

諸召会における失敗――バビロンの原則とそれに打ち勝つ道

聖書：啓 17:1-6．18:2, 4, 7．レビ 1:3-4, 9．6:10-13

Ⅰ．バビロン（ヘブル語、バベル）の原則は、人の能力により、れんがによって、地から天に何かを建て上げようとする人の努力です――創 11:1-9：

Ａ．石は神によって造られますが、れんがは人によって造られ、人の発明、人の産物です。

Ｂ．バビロンの原則にしたがって生きる者は、自分が制限されていることを見ていません。そうではなく、彼らは自分の天然の能力によって、自分の人の努力で主の働きを行なおうとします――参照、Ⅰコリント 15:10, 58。

Ｃ．神の建造は、人の造ったれんがで、人の労苦によって建てられるのではありません。それは神の創造し造り変えられた石で、神聖な働きによって建てられます――Ⅰコリント 3:12。

Ⅱ．バビロンの原則は偽善です――啓 17:4, 6．マタイ 23:25-32．ルカ 12:1：

Ａ．アカンの罪の意義は、彼が美しいバビロン人の外套をむさぼり、体裁のために自分自身を改善し、自分自身をさらに良く見せることを求めるということでした――ヨシュア 7:21：

Ｂ．これは、聖霊を欺いたアナニヤとサッピラの罪でした――使徒 5:1-11：

１．彼らはあまり主を愛していませんでしたが、大いに主を愛している者のように見なされたかったのです。彼らはふりをしていただけでした。

２．彼らは進んですべてを神に喜んでささげたのではなく、人の前で、すべてをささげたかのように振る舞ったのです。

Ｃ．わたしたちは自分の実際の状態に符合しない外套を着るときはいつも、バビロンの原則の中にいます――マタイ 6:1-6．15:7-8。

Ｄ．虚偽に行なわれて人から栄誉を受けるあらゆることは、遊女の原則の中で行なわれることであり、花嫁の原則の中ではありません――ヨハネ 5:41, 44．7:18．12:42-43．Ⅱコリント 4:5．Ⅰテサロニケ 2:4-6。

Ⅲ．バビロンの原則は、自分自身をやもめと考えるのではなく、自分自身に栄光を帰し、ぜいたくに生きるという原則です――啓 18:7：

Ａ．堕落した者だけが、自分自身をやもめでないと考えます。ある意味で、キリストにある信者は現在の時代にやもめです。なぜなら、彼らの夫、キリストが彼らから離れているからです。わたしたちの愛する方がこの世にいないので、わたしたちの心はここにありません――マタイ 9:14-15．ルカ 18:3。

Ｂ．過度であるわたしたちの生活におけるものは何であれぜいたくであり、バビロンの

原則にあります――Ⅰテモテ 6:6-10。

Ⅳ．バビロンの原則は遊女の原則です――啓 17:1-6：

Ａ．バビロンの目的は、人が自分自身のために名を挙げて、神の御名を否むことです――創 11:4：

１．わたしたちの主以外のどの名を取ることによっても召会を名づけることは、霊的な淫行です――参照、啓 3:8。

２．召会は、キリストに嫁ぐ清純な処女として、彼女の夫以外のどの名も持つべきではありません――Ⅱコリント 11:2．Ⅰコリント 1:10。

Ｂ．バビロンは混乱を意味します――創 11:6-7：

１．わたしたちは召会の中で、異なる種類の語りかけを持つべきではありません。わたしたちは一つの務めの下で、一つからだのために一つの唯一の教えをもって、ただ一つの思いと一つの口を持つべきです――ローマ 15:5-6．Ⅰコリント 1:10．ピリピ 2:2．Ⅰテモテ 1:3-4。

２．わたしたちは自分の思いの中にいるとき、バビロンの原則の中にいます。わたしたちは霊の中にいるとき、今日のエルサレムに、神聖な一がある中にいます――ヨハネ 4:23-24．エペソ 4:3。

３．わたしたちがあえてどんな分裂も持つべきでないのは、わたしたちの夫が一であり、わたしたち、彼の妻も一であるからです――マタイ 19:3-9。

Ｃ．バビロンの反逆的な民には、散らすことがありました――創 11:8：

１．古代すべてのイスラエル人は一年に三度、エルサレムに共に集まって来ました。これはバビロンでの散らすことに相対します――申 12:5．16:16：

ａ．神に対する礼拝のこの唯一の場所、エルサレムによって、彼の民の一は各世代にわたって保たれました――詩第 133 篇。

ｂ．エルサレムはわたしたちの霊を表徴するだけでなく、一の真の立場、地方の立場も表徴します――使徒 8:1．13:1．啓 1:11。

ｃ．バビロンから出て来るために、わたしたちは「霊の中に、立場に」いなければなりません。

２．ヤラベアムの罪は、礼拝の別の中心を設定することであり、分裂の罪であって、王国、帝国を持って、自分の自己の願望を満たすという人の野心によって引き起こされます――列王上 12:26-32。

Ｄ．バビロンは、神の事柄と偶像の事柄との混合です：

１．バビロンの王ネブカデネザルはエルサレムにある神の家を焼き、神の礼拝のための神の家にあるすべての器を運び去り、それをバビロンにある彼の偶像の宮に置きました――歴代下 36:6-7．エズラ 1:11。

２．新約で、この混合は大いなるバビロンをもって拡大されます――啓 17:3-5．参照、啓 21:18．22:1。

Ⅴ．啓示録における主の召しは、彼の民がバビロンから出て来て、召会の正統性に戻ることです――啓 18:4-5：

Ａ．神の御言によれば、彼の子供たちは、バビロンの性格を持つどんなものにもあずかることはできません――Ⅱコリント 6:17-18。

B．神は他の何にもまさってバビロンの原則を憎みます――啓 11:2, 18：

C．中途半端で絶対的でないものは何であれ、バビロンと呼ばれます：

1．わたしたちは、神がわたしたちを照らしてくださり、彼の光の中で、わたしたちが自分の中にある、彼に対して絶対的でないあらゆるものを裁くことを必要とします――啓 3:16-19。

2．わたしたちはこのようにして自分自身を裁くときはじめて、バビロンの原則を真に憎むと告白することができます――参照、啓 2:6。

3．主のあわれみによって、主がわたしたちに、キリスト以外のどんな栄光や誉れをも求めさせないようにしてくださいますように――ヨハネ 7:18．12:26．ピリピ 1:19-21 前半．参照、出 28:2。

4．主は、わたしたちが喜んで、絶対的である者となり、バビロンの原則の中に生きている者とならないのを求めることを要求しています。

D．神が遊女を裁き、彼女のすべての働きを散らすとき、また彼女であるすべてと、彼女が現す原則を捨て去るとき、天からの声が、「ハレルヤ！」と言うでしょう――啓 19:1-4。

Ⅵ．わたしたちはバビロンの原則に打ち勝つために、日ごとにキリストをわたしたちの全焼のささげ物とする必要があります。全焼のささげ物は、キリストが神のために、また神の満足のために完全で絶対的な生活をし、神の民がそのような生活をすることができるようにする命であることを予表します――レビ 1:3, 9．ヨハネ 5:19, 30．6:38．7:18．8:29．14:24．Ⅱコリント 5:14-15．ガラテヤ 2:19-20．ピリピ 1:19-21 前半：

A．わたしたちの全焼のささげ物としてのキリストの上に手を置くことによって、わたしたちは彼に結合され、彼とわたしたちは一になります。そのような結合の中で、わたしたちのすべての弱さ、欠陥、落ち度は彼によって負われ、彼のすべての美徳はわたしたちのものとなります。これはわたしたちに、正常な祈りを通してわたしたちの霊を活用し、わたしたちが経験的に彼と一になることを要求します――レビ 1:4。

B．わたしたちが祈りを通してキリストの上に手を置くとき、命を与える霊、すなわちわたしたちが手を置くそのキリストは（Ⅰコリント 15:45 後半．Ⅱコリント 3:6, 17．4:5）、直ちにわたしたちの内側で行動し働いて、キリストが地上で生きた生活、全焼のささげ物の生活の繰り返しである生活をします（参照、出 38:1）。

C．全焼のささげ物が祭壇の火床の上で朝まで保たれることが表徴するのは、全焼のささげ物がこの時代の暗い夜を通して、朝まで、すなわち主イエスが再び来られるまで、燃える場所で残っているべきであるということです――レビ 1:9．Ⅱペテロ 1:19。

D．灰、すなわち全焼のささげ物の結果は、神がそのささげ物を受け入れたことのしるしです（レビ 6:10）。祭司が亜麻の衣を着ることは、細やかさ、純粋さ、清さが、灰を扱うことに必要とされることを表徴します。彼が別の衣を着て灰を営所の外に運び出すことは（11 節）、全焼のささげ物の灰を扱うことが威厳のある方法でなされたことを表徴します。

E．灰はキリストの死の結果を示し、キリストの死はわたしたちを終わりに、すなわち、灰にもたらします（ガラテヤ 2:20 前半）。灰を祭壇の東側、日の出の側に置くこと

は（レビ 1:16）、復活の暗示です。全焼のささげ物に関して、灰は終わりではありません。なぜなら、キリストの死は復活をもたらすからです（ローマ 6:3-5）。

F．神はこれらの灰を大いに尊重しています。なぜなら最終的に、これらの灰は新エルサレムとなるからです。わたしたちが減少させられて灰になることは、わたしたちを三一の神の造り変えへともたらします（ローマ 12:2．Ⅱコリント 3:18）。復活の中で、灰としてのわたしたちは造り変えられて、新エルサレムの建造のための尊い材料（金、真珠、宝石）となります。

G．「祭壇の上の火は、その上で燃え続けさせなければならない．それを消してはならない。祭司は朝ごとに薪をその上で燃やし、全焼のささげ物をその上に並べ、平安のささげ物の脂肪をその上で焼いて煙を立ち上らせなければならない。火は祭壇の上で絶えず燃え続けさせなければならない．それを消してはならない」――レビ 6:12-13：

1．祭司が朝ごとに薪を祭壇の上で燃やすことが表徴するのは、奉仕する者が神の願いと協力し、さらなる燃料を聖なる火に加えて、神の食物としての全焼のささげ物の受け入れのために、燃やすことを強化する必要があるということです。朝は燃やすための新しい開始を表徴します―― 12-13 節．参照、ルカ 12:49-50．ローマ 12:11．Ⅱテモテ 1:6-7。

2．全焼のささげ物を燃やすことは、平安のささげ物の甘さのために土台を据えました。これが示すのは、わたしたちが自分自身を絶え間のない全焼のささげ物として神にささげることが（参照、ローマ 12:1）、神との甘い交わりのために土台として据えられるべきであるということです。これは、平安のささげ物の脂肪を燃やすことによって表徴されます。全焼のささげ物と平安のささげ物の両方を燃やすことが表徴するのは、わたしたちが神のために絶対的であることと、わたしたちが三一の神を享受することの両方が、燃やす事柄であるということです――レビ 6:12-13。

© 2016 Living Stream Ministry